自由であるということ……旧約聖書を読む

　　　　　　　　　　　　　　　　エーリッヒ・フロム著　飯坂良明訳

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　河出書房新社　　2010年出版

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　報告者　松本倫明

~第一章　序説~

旧約聖書の目標

旧約聖書は単に、西洋の三大宗教の源泉をなしているから重要であるというだけではない。「旧約聖書はまさに革命的な書物である。(P11)」その書が目指すものは、人間の解放—個人、民族、人類全体に自由を得させること―である。

ヒューマニズムとは

旧約聖書を解釈するにあたって、フロムは徹底したヒューマニズムの立場を取る。そこでヒューマニズムの説明がなされる。

|  |
| --- |
| 人類の一体性、自己の能力の開発→内面的調和と世界平和への人間の可能性 |
| 人間の目標=完全な独立…虚構や幻想を超えた十分な現実認識 |
| 暴力を疑問視←暴力は人間の理性と感情を歪め、幻想を信じさせる |

ヒューマニズムが目指すのは、全世界的な個人の内面的な独立と世界平和である。

ユダヤ人は歴史上、自分の国を失った。然しこの事実すらヒューマニズムの観点からは幸福であった。なぜならそれは世界的なヒューマニズムの伝統を維持、発展させることを可能にしたからである。

~第二章　神について~

神概念の変化

心理的、精神的な経験に関する事象を指す言葉や観念は、それを用いる人が変わるに従い、変化する。また観念に関する経験は共有される考えがある。

旧約聖書の神観念の歴史には、以下の共通した考えがある。

|  |
| --- |
| 自然や人工のものは究極的実在とか至上価値を成さない |
| 人間にとって最高の価値、目標を表す唯一者が存在する |
| 人間に与えられた愛と理性の能力を最高度に発展させて世界と合一することを目指す |

一方、この神観念もそれ自身の生命と発展をもっている。

1. 知恵の実

神は自然と人間を作った絶対的支配者として描かれていた。然しこの絶対的権力は、人間が神に対抗し得るという考えと並立している。人間は「知恵の実」「命の実」を食すことによって神の地位に立つことができる。そしてアダムとエバは知恵の実から食すのである。ここから人間は神の至上権に挑戦する。「人間の最初の行為は反逆であ(P30)」り、「人間の自由の始まりでもある(P31)」のである。これに対し、エデンからの追放という暴力行為を神は用いる。

1. 神観念の矛盾

神は最高の支配者であるが、一方で、自己の内に神たる可能性を有した存在、人間を生み出した。人間が開花すればする程、人間は神に等しくなっていく。

1. ノアの方舟————神との契約

神は勝手極まる支配者として現れる。神は地上の生命を破壊しようと決意するが、後に自らの決意を後悔し、ノアと契約を結ぶ。

この契約は神観念の遥かな発展、成熟への進歩を意味する。なぜならこれは「完全な人間の自由、神からさえも自由であるといった思想に道を拓く一段階であった(P32)」からである。

契約の締結は、神から恣意的な自由を奪い、人間に神に対抗しうる自由を与える。またこの第一の契約は神とヘブライ族の間ではなく、神と人類一般の間のものであった。

1. アブラハム―—————神への要求

神との第二の契約はヘブライ人との間に結ばれるが、神の祝福は、全人類に及び、普遍主義が表明されている。この契約の結果は、アブラハムの神に対する正義の要求に現れる。神が悪い二人の為に五十人を滅ぼそうとしたとき、アブラハムは、神が約束を蔑ろにすることを責める。ここで彼は「要求する権利をもった自由な人間(P37)」となる。そして神は拒否する権利を持たない。

1. モーセに対する神の啓示

|  |  |
| --- | --- |
| (自然の神より)歴史の神 | 名前をもたない神 |

神はモーセに対して名を明かさない。然し偶像崇拝的観念(全てのものは時間と空間の中で完結するから名前をもつ)に慣れたヘブライ人にとって、名のない歴史の神は意味をなさなかった。神はこれに譲歩して、<名無し>という名を出して、妥協する。名がない理由は、最終的な形になったもののみが名をもつ以上、歴史の神として、神は「生きた過程、生成」だからである。

神はヤハウェという名で表されることがあるが、その名も無益に使われることはない。神を表彰することは禁じられる。人間は祈祷において、神へと語りかけることはできるが、神について語ることはできない。

1. マイモニデス神学

名前のない神という観念から、マイモニデス神学が生まれる。それは神の本質を表すのに、肯定的名辞を用いることはできないというものである。この否定の神学の結果として、神学は終焉を迎える。なぜなら神について何も語り考えることができない以上、「神の科学」はあり得ないからである。この神学からは以下の二つの問題が提起される。

|  |  |
| --- | --- |
| 聖書、ユダヤ教における神学の役割 | 人間が神に存在を主張することの意味 |

神学の役割

神学の役割、正統(正しい信仰)について、聖書もユダヤ教も以降、神学を発展させなかった。神が存在するということのみが旧約聖書で見られる神学的教義であり、神について[[1]](#footnote-1)語られることはない。

神の存在を認める意義—————偶像否定

ユダヤ教は神の存在のみを重要な思想としたが、この神学は抑、偶像の否定である。全く、偶像の否定は旧約聖書を貫く宗教的主題である。

1. 偶像とは何かを知る為に、神は何でないかを理解しなければならない。最高の価値、目標である神は、人間、国家、制度、自然等から作られる物ではない。一方、数々の偶像は諸々の人間の熱情が表された物である。人間は偶像に多くを捧げる程、貧困化する(疎外)。
2. 偶像は<もの>であり、生きていない。一方、神は<生ける>神である。偶像は死せるものである。それを造り拝む者も又死せるものなのである。

偶像崇拝対神信仰

偶像が人間の能力の疎外された形である以上、偶像崇拝は必然的に自由や独立と矛盾する。一方、神や聖書は人間に自由を許容し、アブラハムやモーセとのやり取りの中で、人間の神に対する恐れと従属は減少する。神は更に人生の目標とその道を示し、決して無理強いしない。「偶像崇拝はその性質上、隷属を要求するが、その一方、神礼拝は独立を要求する(P62)」。

* 本書において「偶像学」は主な論点とはならないが、それについて有益な指摘がある為、抜粋する。

|  |
| --- |
| 「偶像学」は、疎外された人間は必ずや偶像崇拝者であるということを教える。というのは、その人は自己の生きた力を自分の外にある物の中に移入することによって自己を貧困化するとともに、自分を少しでも保持し、ぎりぎりのところで、自己の同一性を保とうとして偶像崇拝に陥らざるを得なくなるからである。(P64) |

偶像崇拝とは人類は一致団結して戦わなければならない。万人の救済にユダヤ教の信仰は必要ではない。偶像崇拝をし、神を冒涜しない限り、救われる。

名前のない神の意義

本質的属性を持たない神は、偶像崇拝ではないので、権威主義的であることを止める。人間は真に独立しなければならない。これは人間が神からも独立していることを要求している。

~第三章　人間観~

神の似姿

「人間の本性に関する聖書の最も基本的な命題は、人間が神のかたちに造られているということである。(P85)」神は自分に似せて人間の男女を造った。また後には人が神になるかもしれないことを神は恐れる。

神が、人間が神になりうることを妨げる意味の一つには、人間が神になれないことの強調であると考えられる。

聖書における神との近似の観念は、人間が正義や愛を獲得し、実践するべきという預言に表れている。神を人間から区別する特質が「聖」という観念である以上、この「聖」に人間がなり得るという観念は大きな発展である。

律法の実践

人間が神の行為を真似る方法は律法を実践することである。預言者の教えの中心は愛と正義の表現、及びそれを実現させる行動規則からなる。神の行いを自ら行なうことで、益々神に近づき、同時に神を<知る>のである。

人間の進化

然し乍ら、神と人間の区別をなくすことができるという趣旨の見解が、最も偉大な律法学者の内の二人(アキバとラバ)から出される。これが意味する所は、人は死ぬ運命にあり、自己の内の神的要素と世俗的要素の葛藤があるといえども、律法や預言によって、内在的本性を発展させることができる、ということである。

この人間の進化が持つ性質は、自然的な束縛からの独立である。自然に服従した人間が自由と独立を目指す。

1. 知恵の実

知恵の実を口にすることが、人間の個性化の開始である。ここで人間は自然と対立し、真に人間的となる時、和解できる。

1. ヘブライ人としての民族的歴史の始まり

アブラハムは神の指示に従い、家を離れ、エジプトに定住する。そこでヘブライ族は奴隷制という社会的紐帯、自己を奴隷にする紐帯をも断たないといけない。

独立に対する解答

独立、自由は「内面的能同性」及び「創造性」の段階に人間が完全に達した時に成し得る。つまり、世界を把握し、関連づけ、合一する時にのみ、独立は達成される。然し真の独立は最も達成の困難なものである。

聖書、ユダヤ教が与える答えは以下の通り。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 人間は無力 | 人間は発達の可能性に開けている | 人間は紐帯への固執を打破できる |

選民思想と普遍主義

ユダヤ教は選民思想、ユダヤナショナリズムで表されることが多い。ユダヤ人の歴史の反動から、このナショナリズムの存在を説明することができるが、それを許容する説明はなされない。一方、この選民思想は普遍主義の原理と対立することでバランスをとっている。

人類の一体性の観念は、人間の創造の最初、乃ち一人の男と一人の女が造られる所から見られる。更にノアとの契約、アブラハムとのやり取り、異邦人に対する愛にも表れる。

~第四章　歴史観~

最初の反抗————自由からの逃走

アダムの堕罪から人間の個性化が始まるが、これは一体性の喪失でもある。孤独になり、自然からも疎外され、反抗以前の世界に帰る望みを抱く。自意識を棄て、自由から逃走しようと願う。然し自己と自然の距離感を感じてこそ、再び自己、他者、自然とより高い次元で合一する契機となる。

この新たな調和は「メシアのとき」と呼ばれる。それは勝手に到来するものではなく、人間の努力によって将来する。人間が自己を滅ぼすか、新たな一体性を実現するかがユダヤ教のメシア主義である。

革命の要件

出エジプト

モーセは神から預言を授かり、様々な関係者との数々のやり取りの後にエジプトを脱し、奴隷制から解放される。この物語には一連の流れがある。

解放の可能性は、人々が苦しみを経験し、神がそれを理解して除こうとする時に生じる。苦悩は迚も人間的であり、人間を結びつける。人間は苦悩から何を成すべきかを知ることはできないが、それが早く終わることを願う。この願いこそが解放を求める最初の衝動となるのである。

砂漠の旅

エジプトを脱した後、ヘブライ人は放浪の最中、飢えと乾きに悩み、自由を恐れる。なぜなら、エジプトでは秩序、決まりのある生活を送り、跪くべき監督者、王、偶像があったからである。

神は放浪者に毎朝、パンを降らす。この際、一日分以上拾ってはいけないという規則がある。食物は蓄えるのではなく、食べるものであるからである。同様に人生はしまっておくものではなく、生きるものであることも表される。但し、安息日の前日は例外になる。

十戒

モーセは十戒の記された石盤を与えられると俱に、民全員を祭司にする(つまり祭司階級の否定)、箱を造るように命じられる。これは目に見えないものを信じられない民に対する妥協である。

モーセの死

モーセの死は二つの側面から説明できる。

第一に、革命は時間が経って成功する。種々の「からの自由」は「への自由」へと繋がる。各世代の進歩は一歩ずつ、自由を実現していく。

第二の側面は、預言者の引き継ぎである。モーセは自己中心的な部分が見られたが、それは自由のうちにある指導者として相応しくない。モーセに代ってヨシュアが業を受け継ぐ。

1. 筆者が「について」を強調するのはこの言葉は「物」についてのみ使われるからである。 [↑](#footnote-ref-1)